

やなぎはら・むつお 大阪芸術大学名誉教授。1934年、高知県生まれ。京都市立美術大学工芸科陶磁器専攻修了。ワシントン大学陶芸科講師などを歴任。国内外で個展多数、受賞多数。

「風が入り込んで抜けていくような  
“中”をもつ器を作りたい」



「風の館」(43.0 × 24.0 × 高さ 40.0cm)



## 見たことのない 焼き物を作る

photo: Yasukuni Iida text: Yurie Kimura



「風蝕の形」(37.5 × 36.0 × 高さ 22.5cm)

### Information

高島屋美術部創設110年記念  
柳原睦夫展 一風に就いてー

日本橋店 6階  
3月28日(水) → 4月3日(火)  
京都店 6階  
4月25日(水) → 5月1日(火)  
ジェイアール名古屋タカシマヤ 10階  
5月9日(水) → 15日(火)  
大阪店 6階  
5月30日(水) → 6月5日(火)  
上記各店美術画廊  
※最終日は午後4時閉場

## 見

たことがない焼き物を作る。「これが自分に課しているルールのひとつ。どこかで見た、と言われたら、焼き物はやめる」柳原睦夫氏は医師であった父親の反対を押し切って進学した京都市立美術大学で富本憲吉氏と出会い、陶芸の基礎と理念はもちろん、物の見方、考え方など多くを学んだ。そして陶芸を含む文化、社会など様々に思索を深めながら、またアメリカの現代陶芸、中国の陶磁器などにも目を向けながら、独

自の色彩、文様、形態をもつ作品を60年以上制作し続けてきた。制作にあたって柳原氏が大事にするのは「中」。中を作れば外ができるという。ヒントになったのは、富本氏の「蕾が膨らみ、花が開いていく過程をよく見なさい。それは美しい壺、鉢、皿の姿を暗示している」という言葉が秘めた「内側の生命力に触れなさい」ということであり、華道家で造形作家の中川幸夫氏と交わした「僕が手を入れて怖い、と

感じる器を作ってください。命がけで一枝入れさせていただきます」という約束だ。結局実現しないうままではあったが、造形は「中」が重要、という共通認識があったという。今回の展覧会「風に就いて」でも、ポイントはその「中」にある。「人間はたったひとつの道を行くわけじゃなくて、肉体的にも、人生哲学的にも大きな変革を経ながら人生を進んでいく。ですから、卵のような密封した「中」の強さではなく、風が入り込んで抜けて

いくような「中」をもつ器を作りたい、という気持ちは今、強いですね。「止まらない」という、私の絶対的なルールに当てはまるのも風です。風を自分のトレードマークにしたい、という思いを追求してもいい頃、と。今後、さらにそれを進めていくことで、曖昧性を許容するよう(非常に日本的な感性の、あるひとつの終焉に近づくんじやないですかね)」84歳の柳原氏の、新たな作品シリーズの幕開けである。